



保田 龍門

やすだ りゅうもん

1891 - 1965

1891 (明治24) 年、那賀郡龍門村 (現：紀の川市) に生まれる。本名は重右衛門、龍門と号した。粉河中学校を卒業後、一時は医師を志望するが、東京の上野で開かれていた文部省美術展覧会 (略称：文展) で菱田春草の「落葉」と出会い、一度はあきらめた美術の道を再び目指そうと決め、太平洋画会研究所で絵画の指導を受け、1912 (明治45) 年東京美術学校西洋画科に入学する。

美術学校在学中に二科展に出品し入選、1917 (大正6) 年の第11回文展では「母と子」で特選を受賞する。その後、日本美術院の研究所で彫刻の勉強をはじめ、以後日本美術院展を発表の場とした。

1920 (大正9) 年渡米し、サンフランシスコ、ニューヨークを経て翌年にはパリに入り、ロダンの助手であったブールデルの教室で彫刻を習う。また、ヨーロッパ各地を遊学する途中、南仏のマイヨールのアトリエを訪ねた。ギリシアのアルカイックな彫刻に心酔して女性のおおらかな裸体像を追求したマイヨールの作風は、龍門が終生追い求めた母性愛のテーマに影響を与えた。

母逝去の知らせをきいて1923 (大正12) 年に帰国するが、欧米で3年余り研鑽を積んだ経験は、のちの自己の造形世界を築いていく際のたしかな礎となった。

帰国後は、東京での制作をやめ、郷里の和歌山に西村伊作設計のアトリエを建て活動の本拠を移し、その後大阪に転居する。

戦後は、大阪市立美術研究所、和歌山大学で後進の指導にあたり、関西の美術界に大きな影響を与えた。

絵画と彫刻をともに追求するという志を貫いた保田龍門は、1965 (昭和40) 年73歳で亡くなった。

(引用：和歌山県文化情報アーカイブ「紀の国の先人たち」)



『母の像』 (1915)



『父の像』 (1915)



『自画像』 (1915)



『アンドレの首』 (1922)

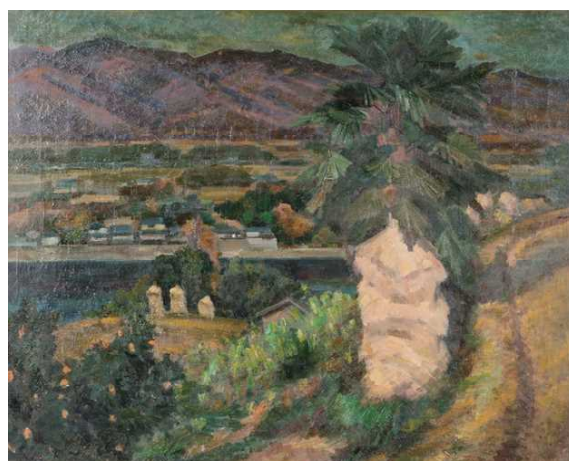


『少女』 (1925)

(所蔵・図版提供 和歌山県立近代美術館)



『家族の肖像』 (大正末～昭和初期)



『粉河風景』 (1930～1935頃)

(所蔵 紀の川市)

略 歴

- 1891 (明治24) 年 和歌山県那賀郡竜門村 (現 紀の川市) に、保田久吉、チエの間に生まれる。
本名：重右衛門
- 1905 (明治38) 年 荒見高等小学校卒業。
- 1909 (明治42) 年 粉河中学校卒業。
- 1912 (大正元) 年 東京美術学校入学。
- 1915 (大正4) 年 二科展で「自画像」など入選。
- 1917 (大正6) 年 東京美術学校卒業。
第十一回文展で「母と子」入選。
- 1918 (大正7) 年 第五回院展に出品した「肖像 (石井氏の像)」が樗牛賞を受ける。
- 1920 (大正9) 年 日本美術院彫刻部同人に推挙される。
海外留学に出る。
アメリカを皮切りに帰国まで欧米を巡る。
- 1921 (大正10) 年 パリのグラン・ショミエールでブールデルに師事。
- 1923 (大正12) 年 南仏にマイヨールを訪ねる。
母の訃報を受け帰国。
- 1924 (大正13) 年 東京 徳川頼貞邸にて「滞欧記念展覧会」を開催。
北淳子と結婚。
- 1925 (大正14) 年 郷里に帰る。
- 1935 (昭和10) 年 大阪府大阪市に転居。
- 1938 (昭和13) 年 大阪府堺市に転居。
- 1939 (昭和14) 年 和歌山県庁舎のレリーフ「丹生都比売命」、「高倉下命」を制作。
- 1946 (昭和21) 年 大阪市立美術研究所教授に就任。
- 1953 (昭和28) 年 和歌山大学教授に就任。
- 1954 (昭和29) 年 紀陽銀行本店 (和歌山市) の壁面レリーフ「春夏秋冬」完成。
- 1959 (昭和34) 年 和歌山大学教授を退官。
- 1965 (昭和40) 年 2月病没。
「南方熊楠胸像」が未完のまま残る。